

令和 4年 4月 7日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 202080065

氏 名 福田紗耶香

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 ユトレヒト (国名 オランダ)
2. 研究課題名 (和文) : オランダにおける社会的包摂をめぐる就学前教育制度に関する研究
3. 派遣期間：令和 3年 11月 7日 ~ 令和 4年 3月 8日 (122日間)
4. 派遣先機関名・部局名：ユトレヒト大学社会行動研究院教育学部
5. 派遣先機関で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本研究は、オランダの保育制度における質保証に社会的に不利な層のための教育がどのような影響をもたらしたのか明らかにしようとするものであり、渡航による現地での研究によって得られたデータは、オランダ社会の文脈を理解することに寄与した他、オランダ国内でしか得ることのできないデータ分析を、ユトレヒト大学の調査研究者の下で行った。

なお、これらの研究活動に際して、ユトレヒト大学の倫理委員会の承認を得ている。

具体的には、オランダのチャイルドケア法の改正に関わった政策担当官への聞き取り調査、保育施設の監査に関わる政策担当官への聞き取り調査、「教育において不利な子ども」のための就学前教育の質評価に関わる政策担当官への聞き取り調査を行った。調査に先立って、受入研究者と質問項目について議論し、また調査後には聞き取りの内容について議論した。

また、オランダの全国保育の質モニタリング調査のデータを用いて、「教育において不利な立場にある子ども」のための教育プログラムがを使用することで、保育の質がどう異なるのかを、保育施設の各教室の構成員に着目して統計分析を行った。結果として、プログラムの使用が、「教育において不利な子ども」が多い教室での質の担保に役立っていることが見えてきた。さらに結果の考察を深めて論文を完成させ、5月を目途に、国際誌へ投稿する予定である。

これに加えて、保育の質が高く評価されている施設、低く評価されている施設、「教育において不利な子ども」が多い施設、少ない施設という分類で、8つの施設のビデオデータを観察した。観察を通して、標準化された質評価指標で高く評価される実践、低く評価される実践の違いや、オランダの保育現場の様子を知ることができた。この観察データは考察を補完するものとなる。

その他、詳細な政策決定プロセスの分析のために必要としていた、政策諮問委員会の報告書をユトレヒト大学附属図書館で入手することができた。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

オランダで行った聞き取り調査の分析結果に関しては、これまで書き進めてきた博士論文の論証を補足する内容として盛り込む予定である。また、全国保育の質モニタリング調査の分析結果に関しては、さらに受入研究者の指導を受けながら、論文にまとめ、Early Childhood Research Quarterly もしくは、European Early Childhood Education Research Journal へ投稿する。そして、この投稿論文は、執筆中の博士論文の一部となる予定である。

今後は、新たに入手した報告書等の資料や聞き取り調査のデータ、二次データ分析の結果を用いて、博士論文を完成させることが最大の目標である。そのため、研究計画の方向性としては、まず受入研究者の指導の下で分析結果の考察を深める。教室に占める「教育において不利なこども」の割合とプログラムの使用によって、保育の質がどのように異なるのか、そしてそれがどのような要因によるものなのかについて考察を進めている。次に、オランダで「教育において不利な子ども」のための就学前教育が発展してきたプロセスをより精緻に分析する。現地で入手した学術研究者から構成される政策諮問委員会の報告書、国会の議事録からどんな情報やデータを根拠に政策の進退が決定しているのかを詳述することで、オランダの文脈では何が「保育の質」として有用視されてきたかを明確にする。

さらに、渡航中に明らかになってきたオランダの「保育の質」への関心、評価の論理を保育現場で働く実践者の立場からも検討していくために、追加でインタビュー調査を行う予定である。インタビュー調査の結果は、オランダの「保育の質」がどのように捉えられているのかを分析する際に、マクロな価値とミクロな価値の両面から見ていくために必要であると考えている。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラムに採用されたことで得られたことは、次の二点である。

第一に、オランダに行くことでしか得られないデータと人的ネットワークを得たことである。大規模調査のデータ分析やビデオデータの観察、紙媒体の資料の入手が可能になったのは、ユトレヒト大学に一定期間ゲストリサーチャーとして在籍することができたからである。統計データやびでーデータなど、高度な守秘義務が課せられたデータを取り扱ううえで、ゲストリサーチャーとしてオランダの大学に所属を得たことの利点は大きかった。

また、受入研究者と議論したり、指導を受ける時間をもらえたことも、本プログラムに採用されて得られた貴重な機会であると考えている。これまで日本国内にいながら、入手可能な情報の解釈を試みたが、オランダの保育・就学前教育の動向について精通している研究者の方々と議論したことで、現地で何が課題となっているのか、課題に対してどのような意見が対立しているのかなどを理解することができた。これによって、オランダの事例をより現地の文脈を踏まえて理解することが可能になったと考えている。

第二に、現地語の習得である。日本にいてもオランダ語学習は可能であるが、日常的にオランダ語を聞き、話し、読むことが当然の環境に身を置いたことで、さらにオランダ語運用能力が高まったと感じている。特に、コロナ禍ということもあり、日常的にニュースへの関心が高まったり、近所の人とも情報を交換し合うことで、市民の見方も知る機会となった。一見関係のないように思われる日常的な会話の中にも、表現の仕方や、評価の仕方、ものの見方など、オランダ社会の価値観を感じることもあり、こうした価値観を体験したことで、オランダの保育・就学前教育制度を分析する際に、申請者がこれまで感じてきた違和感をオランダの文脈を踏まえながら説明することが可能になってくるのではないかと考えている。

以上の二点が、本プログラムに採用されたことで得られたことである。予測不能な事態が続く中で、このような貴重な機会を得たことに感謝し、また研究成果として社会に還元したいと思う。